

戦前までは、私どもの住む和田・高円寺には草原と呼ばれる空間があつちこつちにあつたものですが、主なもの二つを紹介します。今青梅街道と環七の交差点の北側に「庚申様の原」という広い原があり、夏には余興などが行われ蚊に喰われながら見に行つたものです。

この北隅にはケヤキの大木があり、その根本に庚申堂があり、いつもお花がありました。



高円寺南1丁目庚申堂

今この複数の庚申堂は環七の東側に移されています。又このお堂の脇に鉄の火の見櫓が立って、上に半鐘が吊るしてありました。

さてここでは「鉄管原」について述べたいと思います。

この地は今のセシオン杉並と、その南側にある都営住宅、梅里公園で真盛寺の門前までの広い地域でした。



梅里公園から見た真盛寺の森

ここに昭和の初め荒玉水道(玉川から北区へ)が設けられたが、その工事拠点としてこの原っぱが利用され、バラック作りの建物があつた。工事終了と共に取り払われ元の原っぱになってしまいましたが、名前だけは「鉄管原」と残つたのです。セシオン杉並の処は草野球のグラウンドになっていましたが南側はそのまま、子供たちの絶好の遊び場、源氏とか平家という大型のバツタやらギンヤンマなどという大型の貫緑あるトンボなどが飛び、蚕糸試験場の白衣を着た職員が生糸の先を結んでトンボの目の前に投げ、食いついて落ちるのを捕まえていました。

時には兵隊が機関銃や大砲を訓練で空砲を撃つて人々を驚かせたこともありました。

戦時色が濃くなると、ここで警防団の人などが退役軍人の指導でよく訓練をしたものです。



真盛寺入口

しかし周辺には二階以上の建物はなく、夕暮れになると富士山が森などの間からよく見えました。

やがてこの原の北側に杉並第十小学校ができました。旧杉並村にできた小学校はみな杉並と呼称し、その十番目に出来たものですが、昭和二十年五月二十三日夜の空襲で短時間に全焼してしまいました。そして二日後の二十五日の山の手大空襲では周辺が大被害を受けましたが、この時人々は、この杉十小学校の焼け跡に避難するなど鉄管原は多くの日知人の命を救いました。

今、草原の面影は全くありません。ただ真盛寺森のみは昔のままです。

昭和の一桁の鉄管原を思い出すままに記してみました。

原田 弘氏

杉並郷土史会会長・日本歴史学会会員・杉並区文化財保護指導員・日本ペンクラブ会員

これは、平成十九年一月二十日発行

「ふれあい百五十二号」に掲載されたものです